

G (ガウディについての小説) G (la novela de Gaudí)

タイトル：G (ガウディについての小説) G (la novela de Gaudí)

著者：ダニエル・サンチェス=パルドス Daniel Sánchez Pardos

出版社：プラネタ Editorial Planeta

出版年：2015年

ページ数：560ページ

言語：スペイン語

読者対象：一般

ジャンル：文学

レポート作成：小原京子

概要

1874年10月。ガブリエル・カマラサは、ロンドンで数年の亡命生活を送ったのち、家族とともにバルセロナに戻ってきたばかりだ。ラ・ロンハ美術学校の初日、入学2年目の若者アントニ・ガウディと知り合う。ガウディは謎に包まれている。その年齢の学生とは思えないほど豊富な建築の知識を持ち、交霊術とオカルト植物学と写真にも興味を寄せる。また、バルセロナ社会の底辺の人々とコンタクトを持ち、彼らと怪しげな商売をしている。ガウディはまた推理力に秀でている、少なくともそう自負している。やがてふたりの学生の平穏な生活が、殺人事件と謎の陰謀によって乱され、若きガウディの才能が余すところなく試される。

おもな登場人物

ガブリエル・カマラサ：「ラス・ノティシアス・イラストラダス」紙社長の長男だが、父親の仕事に反発している。ラ・ロンハ美術学校で建築を学ぶ学生。21歳。

アントニ・ガウディ：ラ・ロンハ美術学校で建築を学ぶ学生。22歳。独創的な建築観を持つ。洞察力が鋭い。

フィオナ・ベッグ：「ラス・ノティシアス・イラストラダス」紙の主任イラストレーター。自由奔放で魅惑的なイギリス人女性。

ビクトル・サンマルティン：ライバル紙「ラ・ガセタ・デ・ラ・タルデ」紙のジャーナリスト。

エドゥアルド・アンドレウ：ガブリエルの父を恨む美術商。

あらすじ

1874年10月、激動の街バルセロナ。1868年9月の栄誉革命で誕生した第一次共和制が崩壊に向かう中、パリに亡命していたボルボン王家のアルフォンソによる王政復古の計画が水面下で進んでいた。

カマラサ一家も1868年以来ロンドンで6年間暮らしたが、父センプロニオ・カマラサは経営していたオークション会社をたたんでバルセロナに戻り、英国人のベッグ父娘とともに挿絵を多用して事件報道をするタブロイド紙「ラス・ノティシアス・イラストラダス」の発行を始める。長男のガブリエル（僕）は父の生き方に反発し親子の間には距離がある。

物語は、火事の場合から始まる。夕刊紙「ラ・ガセタ・デ・ラ・タルデ」の社屋が炎に包まれている。ラ・ロンハ美術学校での初めての授業に向かう途中だったガブリエルは、「ラス・ノティシアス・イラストラダス」紙のイラストレーター、フィオナ・ベッグを火事現場で見かけ近づこうとして、鉄道馬車に轢かれそうになる。それを危機一髪救ったのが22歳の若きアントニ・ガウディ。ガウディとガブリエルは意気投合する。ガウディはラ・ロンハ美術学校で建築を学ぶ1年先輩だったが、授業で聞く古臭い建築理論に飽き足らず、独自の建築観を持ち、アパートの屋根裏部屋では紐（ひも）と錘（おもり）でサンタ・マリア・ダル・マル教会を逆さ吊りにした不思議な模型を作っていた。タラゴナの実家は裕福ではなさそうだが、上等な服を身に着け、安いとは言えないレストランで食事し、ナイトクラブ「モンテ・タベル」に出入りするなど、ガウディは謎めいた人物だった。付き合ううち、バルセロナ交霊術協会のために霊の映像をとらえるカメラを開発していること、小瓶に入った怪しげな秘薬の密売で高額収入を得ているようだということがわかってくる。裏の世界で彼は「セニョールG」と呼ばれていた。

火事後、「ラス・ノティシアス・イラストラダス」紙を、犯罪事件をセンセーショナルに報道する下劣な新聞だ、特にフィオナ・ベッグの挿絵は酷い、と批判する多くの意見記事が他紙に掲載された。また社主センプロニオ・カマラサは「ラ・ガセタ・デ・ラ・タルデ」ビルに放火した張本人だと訴えられて、警察が捜査を始める。一方で、「ラス・ノティシアス・イラストラダス」紙を即刻廃刊しろ、密かに進めている王政復古の陰謀をやめると強迫する匿名の手紙が連日家に届く。洞察力の鋭いガウディは記事や手紙のほとんどは、ビクトル・サンマルティンというジャーナリストひとりが書いていると推理する。

ある日、「ラス・ノティシアス・イラストラダス」紙が名士たちを招いて開催したパーティの席に、ロンドン時代にオークションの取引でセンプロニオ・カマラサとトラブルになり破産したエドゥアルド・アンドレウが乗り込んできて口論となり、父カマラサがアンドレウ老人の顔を平手打ちするという事件が起きる。アンドレウは父カマラサの不正を証明する証拠が入っているという赤いファイルをちらつかせながら出て行ったが、数日後、アンドレウが自室で胸を刃物で刺され死んでいるのが見つかる。殺人現場にはS.C.のイニシャルが入ったたばこケースが残されていた。その時間のアリバイがなく、自宅の机の中にアンドレウの赤いファイルを隠していたセンプロニオ・カ

マラサは殺人容疑者として逮捕される。父の無実を信じるガブリエルは、真犯人を見つけようとガウディとともに動き始める。

父が不在となって初めて、ガブリエルは、母ラビニアから、父センプロニオのボルボン王家復権運動について知らされる。ロンドンでのオークション経営は金銭面で、バルセロナに戻って新聞社を始めたのはオペレーション面、プロバガンダ面でその計画を後押しするためだった。アルフォンソによる王政復古は刻々と迫り、2日間のバルセロナ訪問計画が進んでいた。それまで父センプロニオの仕事や信条に反発していたガブリエルも、新聞社で働き始め、政治体制が変われば父の釈放につながるかもしれないと考えて、王政復古の活動をする母ラビニアを手伝う決心をする。

ガブリエルが忙しい毎日を送っている間に、フィオナとガウディが急接近する。ガウディは彼女を自宅に招き、サンタ・マリア・ダル・マル教会の模型と設計図を見せて、その重さはたった6本か7本の柱によって支える構造になっていると説明する。

父センプロニオの裁判は次々と延期になり、釈放されないまま、12月29日、ついに共和政が倒れ、アルフォンソ12世によって王政復古となる。年明けの1875年1月9日の王のスペイン入りはバルセロナからと決まり、港での歓迎、ランブラ通りのパレード、旧王宮での歓迎昼食会、晩餐会、翌日は出発前にサンタ・マリア・ダル・マル教会で荘厳ミサなど2日間の訪問日程にそって、母ラビニアと支援オペレーション・グループは、父センプロニオが立てたプランをそっくりそのまま実行しようとしていた。初日の予定は華やかな花火と共に成功裏に終わり、母ラビニアは上機嫌で晩餐会から帰宅する。フィオナに誘われてガウディとガブリエルも彼女の部屋で祝杯を上げるが、渡されたタバコを吸った途端、ふたりとも気分が悪くなって意識を失う。目が覚めると朝9時10分だった。フィオナは、メイドにガブリエルは出かけたと嘘をついて自身は姿を消していた。自分たちがこん睡状態に陥っただけでなく、母ラビニアも急に体調を崩したことを不審に思ったふたりは、フィオナが薬物を使って自分たちを家に幽閉したのだと推理し、彼女の後を追って、荘厳ミサが行われているサンタ・マリア・ダル・マル教会に急ぐ。ガウディは、無政府主義者たちが、教会にテロをしかけていると確信していた。教会の全構造が数本の柱で支えられているというガウディの理論を知っているのは、ガブリエルとフィオナだけだ。フィオナはその理論を利用して、教会を崩壊させ王とその支持者たちを暗殺しようと計画しているのだ。フィオナは、ジャーナリストとしての立場と女性の魅力をフルに利用して、ビクトル・サンマルティンと共にミサの前に教会内に入り支柱の下にこっそり爆弾を仕掛けていた。主祭壇で荘厳ミサが行われる中、ガウディは、いつも小間使い兼ボディガードとして使っている浮浪児エゼキエルの力を借りて、時限爆弾が入った袋を全て回収し、すんでのところ爆解除に成功する。王一行は無事にバルセロナを出発した。ガウディの推理によれば、父センプロニオに殺人罪の汚名をきせて国王警備計画からはずすため、ビクトル・サンマルティンがアンドレウを刺殺したあと、フィオナがアンドレウの部屋に父センプロニオのたばこケースを置き、殺人現場から赤いファイルを持ち出して父センプロニオの机に隠した。さらに、フィオナとサンマルティンは教会に爆弾を仕掛けて王とその支持者たちを暗殺しようと企んだが、フィオナは、ガウディ、ガブリエル、母ラビニアの3人がテロの犠牲者になることを避けたくて、ガウディとガブリエルに麻薬タバコを吸わせ、母ラビニアのコップにモルヒネを垂らし、サンタ・マリア・ダル・マル教会に行けないように画策したのだろう、とガウディは推察する。国王暗殺に失敗したビクトル・サンマルティンとフィオナはバルセロナから姿を消した。数日後、口紅を塗りフィオナの服を着て女装し、喉を掻き切られたビクトル・サンマルティンの死体が見つかる。その胸には、フィオナが描いた龍の絵がのぞいていた。

所感・評価

『G』

は、1874年10月から1875年1月のバルセロナを舞台に、共和政が終焉し王政復古する中、殺人事件と国王暗殺テロ計画に巻き込まれたふたりの若い建築学生が、事件を解決していく推理小説。人間観察力と推理力に秀でていると自負する22歳の若き建築学生アントニ・ガウディと、友人ガブリエル・カマラサは、探偵シャーロック・ホームズと相棒ジョン・H・ワトソンを思わせ、著者ダニエル・サンチェス＝パルド（1979年、バルセロナ生まれ）が、アーサー・コナン・ドイルの推理小説『シャーロック・ホームズ・シリーズ』に傾倒し、意識的に似させているのが一目瞭然だ。ガウディとガブリエルが初めて会った時にガブリエルの風采を見てその暮らしぶりや趣味を推理したのは、ホームズがワトソンと初対面で復員兵だと見抜いたのをなぞっているし、『G』ではガブリエル・カマラサが、『シャーロック・ホームズ・シリーズ』ではワトソンがそれぞれ語り手を務めているのも共通している。著者からのオマージュなのだろう。

本書は、私たちの知らない若い頃の天才建築家ガウディへの想像をかきたてる。独創的な建築観を持っていたことは当然だが、ダンディで、知的で、洞察力が鋭く、女性が苦手で、薬草や交霊術に興味を持ち、人間の目で見える以上のものがこの世界にはあると考えているガウディ。タイトルの『G』はGaudiのGだが、スペイン版の帯に書かれたキャッチフレーズは「Grande（偉大）、Genuino（本物）、Genial（天才）。Gを見つけよう」。日本で出版されるとしたら、「G - あなたの知らない若きガウディ」などどうだろうか？

今では、ガウディ建築のないバルセロナなど想像できないが、『G』の舞台は、1874年。城塞に囲まれ、煩雑で淀んで不潔な街だったバルセロナが、人口増加に対応するため城壁を取り払って大きく成長していく時代。ガウディはまだ建築を学ぶ22歳の学生で、サグラダ・ファミリア教会、グエル公園、カサ・ミラなどもまだないバルセロナ。その点では、ガウディの建築に興味があるという読者には肩透かしの感があるだろう。ただしガウディの将来の姿やその都市観を投影しているような人物として、壮大な建築の都市模型を作る孤高の老人ウリオル・クメーリ

ヤが登場する。

バルセロナを舞台にした小説と言えば、イルデフォンソ・ファルコネス作『海のカテドラル』が話題になったが、そのカテドラルが、本書のテロ未遂の舞台サンタ・マリア・ダル・マル教会。小説としての重みから考えると負けるが、スペイン史への興味、ガウディ探偵という意外な設定によって楽しめると思う。英国人画家ミレーの名作「オフィーリア」のモデルとなったエリザベス・シダルのエピソードが脚色して挿入されているのも興味深い。冒頭でガブリエル・カマラサが鉄道馬車に轢かれそうになるのをガウディが助ける場面は、実際のガウディが路面電車に轢かれて死んだ史実を暗示するものだろう。

なお、本書は、2014年フランクフルト・ブック・フェアで、25カ国以上に翻訳・出版権が売れた。日本もそれに続きたい。

試訳

(第1章：P13)

全ては一瞬のことだった。僕はランブラ通りの歩道にフィオナの姿を見つけて、無意識に彼女の方に向かって歩き出し、馬車鉄道専用車線に入ってしまった。まさにその時、火事の恐怖に駆られた馬たちが、ランブラ通りを下って行こうと、猛烈に石畳を蹴り、狂ったように馬具の中でじたばたと始めた。

数秒間だったが、今でもはっきり覚えているのは、前の2頭の馬が僕に向けた飛び出しそうな目、馬の脇腹に滲んだ汗、真っ黒なたてがみを覆っていた灰、喘ぐ馬の湿った唇、僕を踏み倒す直前の息の臭い、荒れ馬の逃走にびくりにした子どもたちの叫び声だ。轢かれれば、その痛みは尋常ではないだろうと観念したが、その衝撃はやってこなかった。

「大丈夫ですか？」

再び停止した鉄道馬車のそばにうずくまって、僕は声の主の方に目を上げた。全ての状況から察するに、僕の命の恩人だった。

背のすらりとした、顔立ちのよい若者で、きれいに髭を剃った顔が青ざめている。僕と同じ年頃、20歳ちょっとくらいだろう。非の打ちどころのないイングリッシュ・カットの黒いズボン、細身のフロックコート姿で、幅の広いスカートのようなネクタイは奇妙な結び方をしている。僕がバルセロナに戻ってから見た中で一番青い目をしていて、シルクハットの下からは、フィオナの赤毛にまけないくらい真っ赤な髪がのぞいていた。

若者の左手がしっかりと僕の右の前腕をつかんでいる。腕を引っ張って暴走する馬の鼻先から僕を救い出してくれたのだろう。

(第46章：P540～)

「アントニ、友だちからの最後の忠告だと思ってきいてくれる？」

人の行動や意図を読んで遊ぶのはやめた方がいいわ。あなた上手くないもの。特に私の心を読むのは下手だわ」

ガウディもまた少し頭を振った。からっぽの部屋の中でふたつの赤毛の頭が対峙した。

開け放たれた窓の外からまた叫び声が聞こえてきたが、僕たちは今度もまた無視した。

「フィオナ。あなたは、バルセロナに来たばかりの頃足しげく通っていた無政府主義者の集会が何かで、サンマルティンと知り合った」ガウディは一步近づきながら言った。フィオナが一步後退りする。「サンマルティンはあなたがセンプロニオ・カマラサに雇われていること、カマラサ氏がバルセロナで新たな事業を始めた実業家というだけでなく、目前に迫っている王政復古計画のキーパーソンであることを耳にした。雇い主の大義に反対するあなたという存在は、マルティンにとって天からの恵みだった。敵陣地の真ただ中に情報源を見つけたんですから。カマラサ氏が練っていた国王訪問計画を知ったとき、サンマルティンは、エゴの塊たる革命家なら誰も夢見る作戦、つまり歴史に残る国王暗殺を実行する絶好の機会だと考えた。9月末の時点でサンマルティンが考えていたいくつかのテロ計画を実行するには、国王警備を直接指揮するセンプロニオ・カマラサが邪魔だった。だから、様々な手を使って彼を排除し、その権限を家族も含め複数の人間に分担させた。そして、「ラス・ノティシアス・イルストラダス」の重役で、カマラサ家の敷地内に住んでいるというふたつの利点を持った情報提供者としてのあなたを確保したときに、国王訪問の警備態勢は著しく弱体化した。エドゥアルド・アンドレウのことを思い出したのもあなただった。バルセロナの底辺を仕事で動く中でアンドレウと偶然会ったのかもしれないですね。いずれにしても、計画はあなたたちの頭の中で形になっていた。サンマルティンは、彼自身が潜入していた新聞社の社屋に火を点け、センプロニオ・カマラサへの誹謗中傷キャンペーンを開始した。あなたの助けを借りて、彼は「ラス・ノティシアス・イルストラダス」のパーティに潜り込んだ。アンドレウを殺したのもサンマルティンです。被害者のファイルがカマラサ氏の部屋で見つかったときに、敷地内に住む人がまず怪しまれると予測し、あなたに疑惑の目が向くのを避けるため、僕たちとあなたが一緒にいるタイミングを選んで殺したのでしょう。そんな折、あなたたちが計画していたどんなアイデアよりも最も記憶に残る国王暗殺計画を私が提示したのです。そのときあなたは既に国王訪問にサンタ・マリア・ダル・マル教会での荘厳ミサが含まれることを知っていた。私の家に来たあの午後、私のプロジェクトにあれば興味を示したのも無理からぬことです。私が教会の荷重構造の模型で示した柱の配置を、あなたが素晴らしい記憶力で脳裏に焼き付けたのも当然です。センプロニオ・カマラサは排除され、やる気はあるけれど経験不足のラビニア夫人、リーダーを失った支援オペレーション・グループ、「ラス・ノティシアス・イルストラダス」を単独で切り盛りするあなたのお父上。そして警備計画の失敗を狙うあなた自身は国王警備オペレーション関係者の中を自由に動けた。これでは国王の命運も尽きていました」ガウディは少し間を開けた。「あるいは、あなたが私の助けを求めていなければそうになっていたでしょう」

フィオナは真剣な面持ちでうなずいた。

「お見事」右手を頭に持っていき、赤毛をくしゃくしゃっとしながら言った。「私の目に狂いはなかったわ、アントニ。間違いなくあなたはバルセロナで私が出会った中で最も驚くべき人物だわ」

ガウディは一步前に踏み出し、フィオナに両手を差し出した。

彼女はすぐに、また後退りし、その背中が僕の胸に触れ、僕の顎が彼女の髪の中に埋まり、僕は自然と彼女の腰に両手を添えた。

通りから聞こえる叫び声がだんだん大きくなり、変な嫌な臭いがし始めた。場違いだが嗅ぎなれた臭いだ。フィオナの髪の強い香りも負けてしまうような臭い。

「僕に助けさせてください」ガウディは言った。「僕たちに助けさせてください」

フィオナは振り向き、彼女の顔と僕の顔が向き合った。彼女の灰色の瞳、白い肌、頬の曲線と鼻。バラ色の豊かな唇。美しいあご。

「ガブリエル」

「フィオナ」

そのとき、アパートのドアがいっばいに開いて、ピクトル・サンマルティンが現れた。

「紳士諸君、邪魔をして申し訳ないが.....」と、ガウディと僕を見つめ、血の気のない薄い唇に不快な笑みを見せながら言った。「フィオナと僕は行かなきゃならない」

僕はガウディを見つめ、ガウディはフィオナを見つめ、フィオナは最初にガウディを、そしてピクトル・サンマルティンを、そしてまたガウディを見つめたのを今でも覚えている。そして、フィオナの口には、僕との友情が続いた4年間で一度も見せたことのない微笑みが浮かんでいた。

「アントニ、あなたの全ての推理は、見事に的中しているわ」ガウディの頭の方に右手を伸ばし、朝からの大変な一日で乱れていたガウディの髪の一部を撫でつけながら言った。彼のウェーブした髪もまた彼女と同じ赤毛だった。「でもあなたの結論は全て間違っているわ」つま先立ちになり、ガウディの頬にキスしながらこう付け加えた。

「そのことをよく考えてみて」

窓から入って来る嗅ぎなれた強い臭いは、煙の臭いだ。間違いはない。通りから聞こえていた声は「火事だ」と叫んでいたのだ。

ピクトル・サンマルティンの唇に浮かんでいた微笑みもまた不自然な奇妙なものだった。

「フィオナ。こんなことすべきじゃない」僕は、むき出しになった彼女の肩に手を置き、その素肌の大理石のような冷たさを感じながら言った。

フィオナは僕の方を振り返り、またつま先立ちしてガウディにしたのと同じことを繰り返した。僕の髪を指の腹で撫で、頬にキスしてつぶやいた。

「また会いましょう」

Source URL: <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/ggaudeinituitenoxiao-shuo-g-la-novela-de-gaudi>